



特集



# パプアのカカオ生産者の声をご紹介

from インドネシア

カカオの苗床を案内してくれるサルモンさん

人と自然にやさしい経済活動によってパプアの村落部コミュニティの自立をめざそう!と、カカオキタ社(以下、カカオキタ)がインドネシア・パプア州でカカオの民衆取引に取り組み始めてから約8年の時が経過しようとしています。人との関係性や連帯を基盤にした事業なので、カカオ豆の買付時生産者とのコミュニケーションを大切にしています。

## カカオキタと出会ってからの変化

生産者とカカオキタのある日の話し合いの一部をご紹介します。  
「カカオキタにカカオ豆を売り始めてからどんなことを感じていますか?」  
と聞いてみたところ、「カカオキタと出会ってから、大きな変化を実感しています。カカオ豆から得た現金を銀行に貯金するようになりました。また、私たちが育てたカカオから作るチョコレートも食べられるようになりました」と、生産者の答えは異口同音に好意的なものでした。

カカオキタでは、2015年から生産者がカカオを売って得た現金収入の一部を町の銀行に預け入れる貯蓄プログラムを実施してきました。また、最近では生産者から買付けたカカオ豆でチョコレート菓子を自家製造し、カフェでの販売を始めています。

女性の生産者ラヘル・イウォンさんは貯蓄プログラムで孫の教育費を積み立てています。また、いざという時のためのお金を安全な場所(=銀行)に置いておけることがありがたいと言います。銀行への預け入れは、親戚

## お互いが支え合う関係性

また、多くの生産者が口にしたのは、「カカオキタを通じて確かな売り先があることがありがたい」ということでした。パプアのチョコレートを日本で食べている消費者が遠く日本から訪れてくれることも大きな励みとなっているようです。カカオ豆を丁寧に発酵させることで定評のあるヨルダン・カッセさんは「日本の皆さんに私たちのカカオが良いと認められることが私や村の誇りになっています」と語りました。

生産者の一人ジョン・タルコさんは1980年代に1haのカカオ畑を開きましたが、都市部から来る買付人にカカオを売ることでは将来の展望が見えず、カカオ畑を放置してしまっていたそうです。ジョンさんは、カカオキタが生産者の問題に関心を寄せていることを知り、再びカカオの栽培を始めたと言います。

生産者グループの中心にいるヤフェット・ヨシュアさんは、「以前は森だったところも今はカカオ畑らしくなってきました。買い手がわかることで、カカオの価値を再び見直すことができました。荒れた森や古いカカオの木を手入れして、再び実がなるようにしました。その結果、収穫量が増えています。生産者のやる気はカカオキタがいるからこそ、そしてカカオキタのやる気も私たち生産者がいるからだと思います。つまり、私たちはカカオでつながってお互いに支え合っています」と、関係性を強調しました。

身体に不自由がありながらもカカオ栽培を人一倍がんばっているマルティン・タルコさんは、良いカカオを作る秘訣はカカオの木に「話しかける

カカオキタ社

パプア州のカカオ生産者が収穫したカカオ豆を集荷・加工し、日本に販売する事業体。

からお金を無心された時にノーと言えない伝統的社会的ジレンマに対しひとつの解決策になっているようです。

カカオキタの存在が生産者のカカオに対する理解に変化をもたらしたと話すのはエサウ・タルコさんです。「以前は、多くの生産者がカカオ畑の手入れを怠り、自分で豆の発酵をする人も少なかったです。けれどもカカオキタによる買付が始まってからは多くの生産者がアドバイスに沿って発酵作業をしっかりとるようになりました」



孫のために貯蓄するラヘルさん(左から2人め)



カカオの収穫量が増えたと喜ぶ生産者のジョンさん(左)とヤフェットさん(右)



カカオの木に話しかける、と話すマルティンさん(左端)

ことだ」と嬉しそうに教えてくれました。

現在コロナ禍で困難なこともあります。カカオキタはパプアの実産者と日本の消費者との関係性をより深く、民衆取引で小さなコミュニティが自立発展できるようにしたいと気持ちを新たにしています。

津留歴子(つる・あきこ/カカオキタ社)



カカオキタとは、インドネシア語で「私たちのカカオ」という意味。

カカオキタのカカオの詳細は、オルター・トレード・ジャパンのサイトへ <http://altertrade.jp/cacao>

オルター・トレード・ジャパン (ATJ) 🔍

